



俳壇 読売

矢島 渚男 選

思ひ出が介護の支へ 黄水仙
橋本市 若崎 喬子

【評】長寿の時代になり老老介護が重荷になった。でも、この人と楽しいことがあった思い出もあったことが励みになる。
四季が二季になるを憂ひて鳥帰る
高槻市 村松 讓

【評】二季とは怖ろしい言葉だ。冬と夏か。確かにそんな時代が来そうな感じもする。冬と猛暑の時期になるとは。
駄菓子屋の硝子戸開けるみすゞの忌
葛城市 山本 啓

【評】金子みすゞは悲劇の童謡詩人。雑誌への投稿作によって後世に認められ、教科書にも載った。彼女が二十六歳の若さで自殺したのは一九三〇年（昭和五年）三月十日だった。
唐崎の松の雪吊り縄千本
西尾市 青山 伸一

啓蟄や小舟漕ぎ出す島の朝
相模原市 はやし 央
永き日や推薦状に誤字三つ
志木市 谷村 康志

いいわけを言い出せぬままいぬぶぐり
日立市 菊池 三夫
嗚呼なんて春の夜風の麗しき
東京都 関根ともみ
梅白し瓦礫の中の輪島塗
大津市 千川 修一

鳥籠を洗う母の手春の昼
名古屋市長木 雅彦

高野ムツオ 選

竜天に昇りしのちの大河かな
上尾市 中野 博夫

【評】「竜天に登る」はもとより古代中国に伝わる想像上の産物。だが、こう断定されると雪解氷を退えた大河の勢いや音が、確かに竜が登ったあとの余韻そのもののように感じられるから不思議。
捨つる程出来ぬ俳句や冴返る
川口市 広田 絹子

【評】多作多捨が俳句の極意。それは先刻承知ながら実行できないので、春寒の炬燵でつい頭を抱える。同病相憐れむの感、大いにあり。傷みたる翼のごとき斑雪
久喜市 深沢ふさ江

【評】野原の日陰部分に斑に残る雪。帰ることのできなかつた白鳥の翼かもしれない。
次世代へ残すものあり 蛸蚪の紐
八尾市 黒川 好郎

母の息よりあふれて来しやぼん玉
豊田市 藤本 恭子
春夕焼明日は明るいかも知れず
神奈川県 中島やさか

街川はよどみしままや木の芽張る
佐賀市 栗林美津子
田楽の味噌たれぬよう二口目
草津市 中村美智代
教室にワックス匂う春休み
土浦市 今泉 準一

水仙に風置き去るや貨車二輛
神奈川県 石原美枝子

正木ゆう子 選

菜の花の一望麻酔より帰還
松本市 石垣 立夫

【評】覚めた直後なら、一望の黄はまだ幻想の景だろう。しばらくは夢に現に様々な景や模様が見える。全身麻酔はしないに越した事はないが、すれはしたで面白い経験である。温羅といふ鬼棲みし山春暑し
伊賀市 福沢 義男

【評】温羅は岡山県吉備地方の伝承の鬼。鬼は悪い印象だが、疫病や戦争や悪政の世にあっては、むしろ懐かしく、頼りたくなるような存在だ。いつも手をつなぎし頃や桜貝
東京都 伊藤 直司

【評】幼子と親。子供同士。恋人。新婚夫婦。さまざまな二人が考えられる。いずれも昔の事だが、老いては、安全のために繋ぐというこも。右ききに直さなくても蛭汁
大阪市 大塚 俊雄

蛇口ゆるめて露の臺ころがつて
東大阪市 岡田 卯月
土佐は山土佐は海なり春の旅
岡崎市 加藤 幸男

春の野に下の名前を思ひ出す
奈良県 若林 明良
春めくや秀麗無比の鳥海山
秋田市 進藤 利文
春キヤベツあと千玉と拭ふ汗
八幡市 会田重太郎

文鳥の甘え鳴きする春の宵
千葉市長木 雅彦

小澤 實 選

ベートルズ好きな老人目刺焼く
郡山市 寺田 秀雄

【評】ベートルズはもととは若者が愛した音楽だったが、いつかその若者も老人となった。選者もそのひとりである。目刺を焼きながら、口ずさむベートルズの曲は何だろう。歯を削る音と匂いと花の昼
川越市 益子さとし

【評】桜がよく咲いた昼、歯科医に治療してもらっている。「音」だけでなく「匂い」まで出したところが、妙になまなましい。
九十九の母も雛の日ちらし寿司
八尾市 久田 雅子

【評】九十九の母も、雛の日を迎え、ちらし寿司をいただいている。高齢ながら桃の節句を意識して、ちらし寿司を楽しんでいるのだろう。菲刻む喧嘩のやうな広東語
北本市 萩原 行博

ツナマヨのおにぎりもあり花筵
新潟市 古泉 浩子
ウキスキーのトクトク音も春めけり
市川市 小川 康夫

典座来て播粉木を撰る農具市
名古屋市長木 雅彦
春一番ランボルギーニ加速せし
横浜市 小林 敏和
平飼ひの卵ずつしり春日和
神戸市 吉野 勝子

連れ犬の孤の土喰く植木市
海老名市長木 雅彦

俳句あれこれ 佐藤文香（俳人）

逢って話して②

私の先輩は、句会や飲み会によく呼ばれる。俳句の大会で選者もするし、結社や総合誌の仕事もまわってくる。日中は社員として働きながら、そういう誘いや仕事をこなすのはずいぶん、自分の句集をまとめるのを後回しにし続けてきた。

そんな先輩・阪西敦子さんの句集『金魚』（ふらんす堂）が、ついに刊行される。小学生で俳句を始めた敦子さんの四十年に渡る作品が収められている。「ホトトギス」と「円虹」の伝統を受け継ぎつつ超結句会でも研鑽を積んだ、現代的で気持ちいい作風だ。

私はこの一年、敦子さんの句集制作に伴走してきた。私のつとめは「時間を確保すること」。敦子さんの部屋で、私の家で、近所のお店で、コーヒを飲み雑談しながら、句集のための時間をともに過ごした。東京に友人多し絵双六（阪西敦子）。句集『金魚』を手にした人たちの喜び顔が目に見えらる。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭